



新年度が始まって2ヶ月が経ちました。柔らかい新緑が青々と変化するように、1年生は新しい環境に、他学年の生徒は新クラスや初めての先生方に徐々に馴染み、少しずつ頼もしくなっているように感じます。

保健室では、来室する生徒たちに『他人と比較するのではなく、過去の自分と比較しよう。』と呼びかけています。今年度は特に、生徒一人一人が、昨年度の自分より成長できるよう、頑張っているように思えます。親や周りへ寄りかかっていた人に自律・自立心が芽生え、刹那的に自分のこと（損得）しか考えられなかった人が、周りの人の気持ちや、地球の未来について考えることができるようになってきました。

保健委員会でも、自分や人の健康と環境問題を考え、新たな活動を始めましたのでご紹介します。

◆保健委員会で固定種野菜のタネを蒔きました◆

『タネを蒔いて、育てて食べる』という経験から、自然から、多くの学びが得られます。市場で1割ほどしか出回っていない固定種・在来種の貴重な有機のタネ（ルッコラ・ベビーリーフ・えんどう）を蒔き、育てました。自家採種できるので、タネ取りまで体験できます。



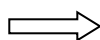
NHKスペシャル2030 未来への分岐点「飽食の悪夢～水・食料クライシス～」でも放映されましたが、国連やICPP（気候変動に関する政府間パネル）の調査・研究によると、地球温暖化の原因は私たちの『食』にあることが分かっています。

簡単に説明すると『緑の革命（1940年代～1960年代）』により、産業としての農業の大増産を達成しましたが、一方でそれは、化学肥料や農薬などの化学工業製品の投入無しには維持できなくなっており、持続可能性が問われています。農薬と化学肥料により、私たちの健康や生物に大きな影響を与えるだけでなく、土地が劣化して二酸化炭素を取り込む力が弱くなり、さらに温暖化が進んでいます。そして私たちは、年間13億トンの食品を廃棄し続けています。食への無関心と、私たち一人ひとりの選択が『健康危機』『気候変動危機』『生物大量絶滅危機』をもたらしています。このままでは2050年には日本でも食糧難になるとのことで、2030年までに選択を変えれば危機を回避できるかも知れないという内容でした。

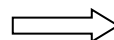
国連をはじめ世界中ではこれを受けて、有機農業やアグロエコロジー（農薬を使わない農法などに留まらず、生態系を守る農業のあり方や社会のあり方を求める科学や運動、実践すべてを含むもの）と、小規模の家族農業を守る取組を推進していますが、日本では逆行して有機農業に『ゲノム編集』や『RNA 農薬』を入れ込み、大規模農業を推進する政策を決めました。保健委員が育てたタネを少しでも、次世代に残せていければ嬉しいです。



タネから芽が出て



大きくなった



コロナワクチンを打つ前に・・・

日本では今のところ、16歳以上にワクチン接種をすることになっていますが、米食品医薬品局（FDA）は10日、ワクチンによってはこれまで16歳以上だった緊急使用許可を12歳以上に拡大すると発表しました。米国内では近く12～15歳の接種が始まる予定です。日本でもいつそのようになるか、分かりません。将来のある皆さんは報道を鵜呑みにせず、慎重に自分でよく考えましょう。不明な点はお医者さんに確認し、親子で納得してから接種することをお勧めします。

ワクチン製造の鶏卵法はパンデミック向きでないとの理由で、遺伝子法が開発されつつあります。今までのワクチンとの違いをまとめました。

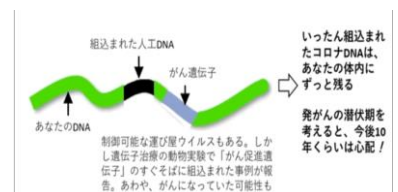
	通常のワクチン	コロナワクチン（すべて遺伝子組み換えワクチン） ・DNAワクチン（A社・阪大） ・mRNAワクチン（F社・M社・東大）
製造方法	鶏卵法 鶏卵にウイルスを接種。増殖培養し、弱毒化または不活化して生または不活化ワクチンとして接種する。	遺伝子法 コロナウイルスの特有の部分（スパイク）の遺伝子を人工的に生成して人に筋肉注射する。生成には特殊なウイルスや界面活性剤、化学物質等を利用する。 簡単に言うと新型コロナ遺伝子の一部を接種することで、人間の体内でコロナのタンパク質をつくらせ、抗体を生み出そうとする原理。
抗原の産生	鶏卵内	人体内
製造期間	6～8ヶ月	6～8週間
研究方法と接種までの期間	基礎研究→動物実験→臨床研究（人への研究）を経て 最低4～5年、10年ほど かかる。	基礎研究・動物実験・臨床研究を同時に進めているので、数ヶ月で完成・接種 できる。接種後数年～10年後の検証データは、ない。安全なのかどうか、将来何が起こるかは、不明。（企業側も2年は追跡調査のため、現時点でのデータは公表しないとしている。）
接種方法	皮下注射	筋肉注射 遺伝子を一番細胞まで届けることができるようにするため。
開発者	ワクチンメーカー	製薬会社や多国籍企業+大学のベンチャー企業等

利点（公表されているもの）

- 1 危険な病原体を一切使用せず、安全かつ短期間で製造できる特徴がある。
- 2 対象とする病原体のタンパク質をコードする遺伝子（DNA・RNA）を接種することで、病原体タンパク質を体内で生産し、病原体に対する免疫力を付与する。
- 3 弱毒化ワクチンや不活化ワクチン（鶏卵法で生成される）とは異なり、病原を全く持たないため安全である。

問題点

- 1 臨床試験の観測期間は、せいぜい数十日の間に、重篤な副作用がなかったことを検証するに過ぎない。数ヶ月後、数年後の体の異変については検証されないまま投与される。
- 2 世界で承認された人間向けのDNA・RNAワクチンは一つもない。DNAの代謝経路は不明で、DNAが長期間体内に残ることによって何が起きるかは、やってみないと分からない。
- 3 遺伝子を打ち込むことへの安全性や有効性への懸念。遺伝子ワクチンは、これまでのワクチンでは確認されなかった疾患が起こりうる。



ウイルスのスパイクタンパク質の構造と働きが100%判明したことから、これをブロックする薬が世界中で開発されていて、あと一歩というところまで来ているそうです。早く治療薬ができると良いですね。

引用：『コロナワクチンの仕組みとその問題点について』新潟大学名誉教授 岡田正彦先生

『医者が警告する未知の遺伝子組み換えワクチン』ウィスコンシン医科大学名誉教授 高橋徳先生